横芝町山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線文土器群-補遺-

渡　辺　修　一

はじめに

筆者は、1992年８月刊行の本誌第35号で、1989年度重要遺跡確認調査（県内主要貝塚）で調査が実施された、横芝町山武姥山貝塚出土の縄文時代晩期浮線文土器群に関する考察（註１、以下前稿という）を行った。その後、当センター資料課の方々の御教示により、迂闊にも整理箱１箱分の遺物に全く目を通していなかったことが判明した。昨年、機会を得てその資料を実見したところ、大半がこれまで公表されている資料とは別個体の土器片であり、重要と思われるものも多く認められたため、ここに前稿の補遺として紹介することとする。

出土土器

41個体を図示する。大半が、縄文晩期終末の所産とされた竪穴建物跡１Ｔ－Ｂから出土しているもので、98、101の２個体のみ遺構外からの出土であるが、同一トレンチ（１Ｔ）内の隣接地点であるため、本来は１Ｔ－Ｂに帰属するものである可能性も高い。なお、各個体に付した番号は、前稿で1～88の番号を使用したため、続けて89～129を使用する。

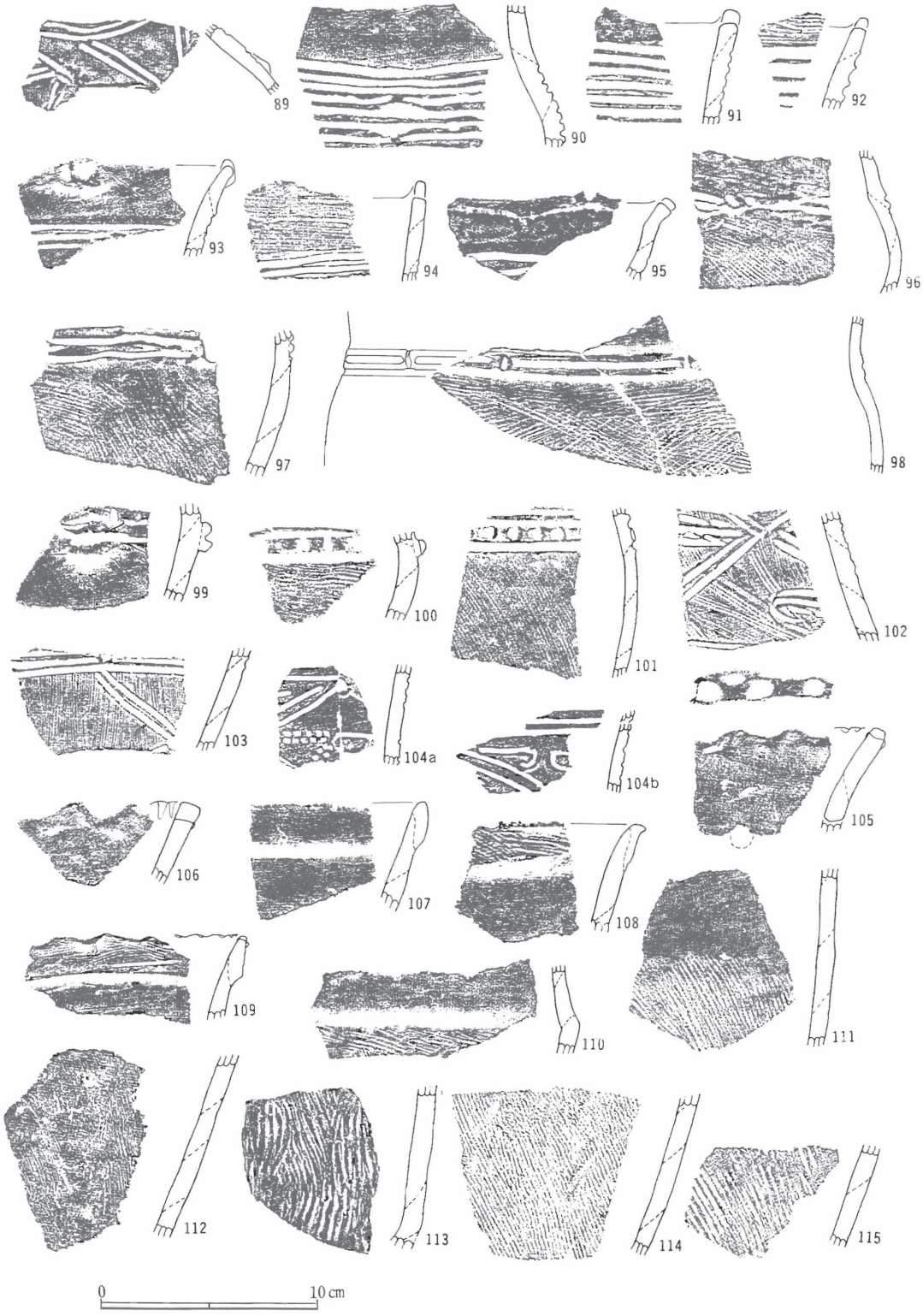
89は壺形土器肩部片である。２条を一単位とする沈線で文様が描かれている。上端は頸部に平行して沈線を巡らせ、以下斜位の沈線を組み合わせて、交点には施文前に突起が貼り付けられているが、文様構成は不詳である。90は甕形土器または広口の壺形土器で、頸部はよく研磨され、肩部にハンガー状浮線文による文様帯をもつ。

91～95は平行沈線文を施された口縁部片で、いずれも小波状口縁をもつことで共通している。口縁部に細密条痕を施す91、92、94と、その部分を研磨する93、95に分けられるが、93の波頂部には突起が、95のそれには刻みが加えられ、細密条痕を施す３個体とは異なる様相をみせる。これら５個体のうち、93を除いて平行沈線の条数は不明であるが、91、92の条数が多いと思われ、描き方も丁寧といえる。とくに92の沈線は他と異なり、太い竹管状工具かそれに類するもので凹線状に描かれ、削り残された部分は浮線状をなしている。

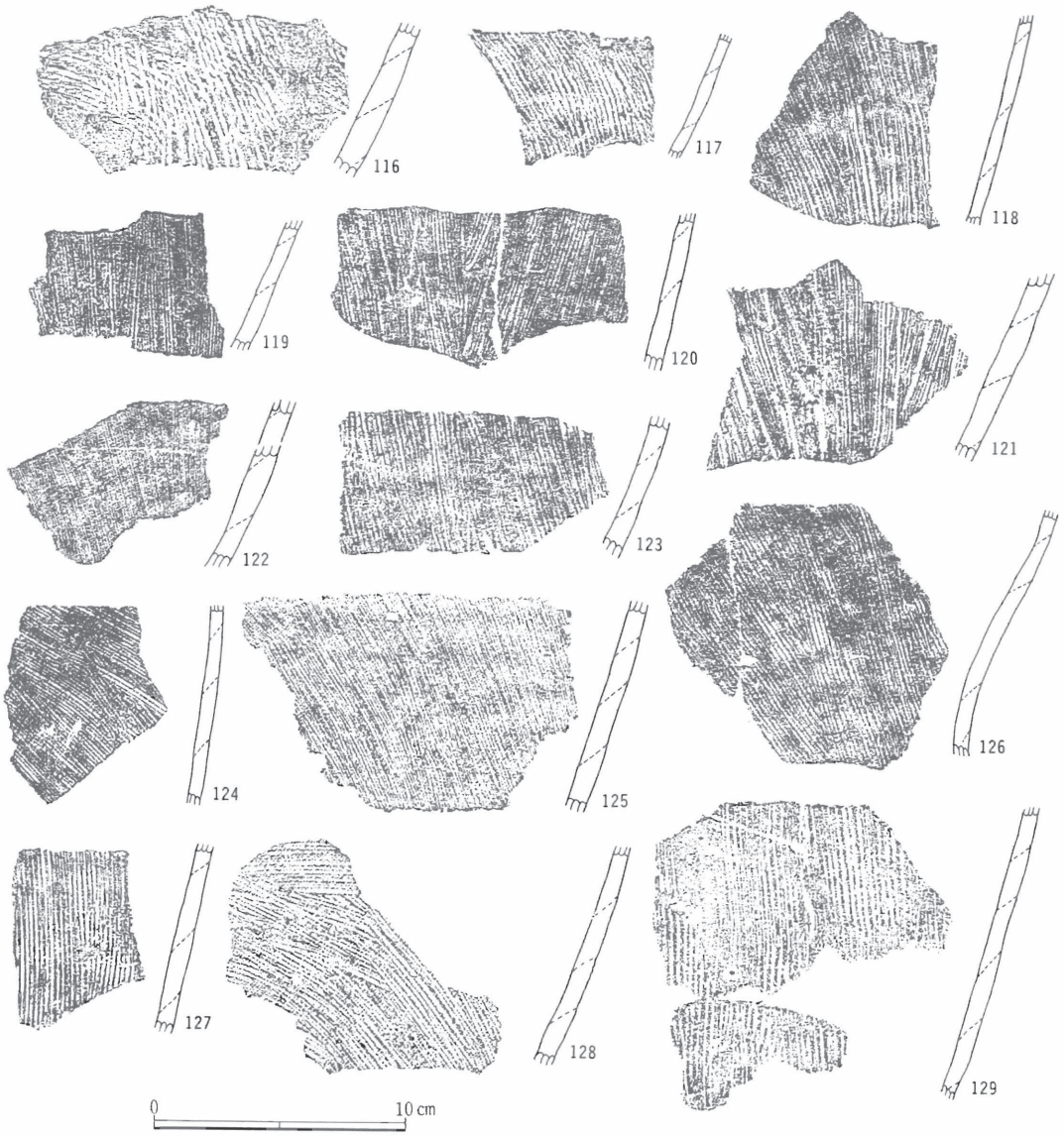
96～101は、甕形土器の肩部（あるいは頸胴部界というべきか）に沈線を巡らせるものである。うち98はその部分が削り出し突帯風となり、96、そして97も貼付ながら類似の形状をもつ。この３個体は、沈線間に規則的に刺突が現れるが、沈線の描き方は異なり、96、97が基本的に２（～３）条の沈線をもつのに対し、98は突帯上に１条の沈線を巡らせるもので、施文がとくに丁寧である。99は高い貼付突帯をもち、突帯上に１条の沈線を巡らせる。100、101はいずれも沈線間にほぼ円形の刺突（列点）を巡らせるもので、101には頸部側にさらに沈線が重ねられていることが判る。なお、上記６個体のうち、99の胴部が無文、100の胴部には撚糸文、他は細密条痕が施されていた。おそらくこれらの頸部は無文帯となるものであろう。

102～104の３個体は、甕形土器の頸部に沈線による文様帯を形成しているものである。いずれも断片的で、文様構成が明らかにならないことが惜しまれる。102は２条の沈線が単位となって、頸部で「Ｘ」字状に交差し、それに横位の沈線が列点を伴って加わり、さらに渦文風の沈線も加わって複雑である。103も102と同様、２条を単位とする沈線が用いられ、菱形（「Ｘ」字状）または横位羽状の文様が認められる。この上位の文様帯は浮線文により構成されるらしい。104は、変形工字文から派生した三角形モチーフを基本に、横位に対になった渦文が加わるが、そこに２列の列点がさらに加わって、やはり複雑な構成をとるらしい。なお、104については、天地が逆転する可能性もあることを付記しておく。

105、106は口端に刻目を連続させている。いず



第１図　山武姥山貝塚１Ｔ出土土器５（1/3）



第２図　山武姥山貝塚１Ｔ出土土器６（1/3）

れも外反する口縁部で、器厚は厚く、105が指頭、106が棒状工具を用いていると思われるが、とくに106の刻目は大きく、小波状というに近い。

107～109は複合口縁をもつ甕形土器の口縁部破片である。107が無文、108には撚糸文、109には細密条痕が施されているが、さらに口端に刻目ももつ。なお、通常研磨されるはずの109の頚部には細密条痕が残されている。110、111は上記と同種の土器の肩部破片である。いずれの胴部にも撚糸文が施されていた。

112以下129まで、甕形土器または深鉢形土器の胴部破片である。112～117までの６個体には撚糸文が、118～129までの12個体には細密条痕が施されていた。なお、上記の103は前稿の24と同一個体である可能性が濃厚である。

おわりに

以上が今回追加する資料の概要である。これらのほとんどが竪穴建物跡１Ｔ－Ｂから出土したものであった。前稿で検討した個体群と同様に、ある程度一括性のある土器群を形成しているものも多いと考えられるが、時期が異なる個体が若干量混入している可能性もある。前稿では、６、51～53、84、88を時期が異なるものとして挙げた。それら

は若干の時間幅はあるものの、主体となる土器群よりも新しく、一部あるいは全部が弥生時代に位置づけうるものであった。今回紹介したなかでは、102、104が同様の可能性があるものとして指摘できる。

この補遺によって、前稿の主旨がとくに訂正されることはないが、紹介資料は甕形土器及び深鉢形土器が主体であるため、前稿で示した器種の比率に若干の変化が生じる。また、撚糸文施文と細密条痕施文の比率についても若干の変化が生じることになる。ただ、基本的に壺形土器と浅鉢形土器の比率に大きな変動はない。もちろん、ごく部分的なトレンチ出土資料である以上、信頼度の高い組成比率を示すことができないことはいうまでもない。

山武姥山貝塚の縄文時代晩期を語ろうとするとき、やはり慶応義塾大学による調査資料の全容が公表されていないことによる限界にあたる。さらに、県が行った調査資料においても、さまざまな制約によっていまだ紹介しえていない晩期前葉から中葉の土器が多数ある。今後、こういった資料の公開について、徐々に努力が払われることを期待したい。一方、山武郡内においては、山武姥山貝塚以外の縄文晩期後葉から弥生時代前期の資料も断片的ながら集積しつつあり、とくに最近では山武町横谷塚群出土の資料（註２）に見るべきものがある。山武郡内の該期の資料については、現在別稿を準備中であり、近くまとめてみたいと考えている。

註１　渡辺修一「横芝町山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線文土器群」『研究連絡誌』35　(財)千葉県文化財センター　1992

註２　財団法人山武郡市文化財センターによって1993年度に発掘調査が行われた。現在整理中で、1996年度に報告書刊行予定。

（現：財団法人山武郡市文化財センター）